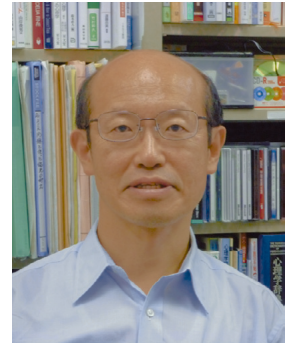


社会科学としての心理学

一橋大学大学院社会学研究科教授
村田光二（むらた こうじ）



Profile — 村田光二

1978年、東京大学文学部卒業。1985年、東京大学大学院社会学研究科社会学心理学専門課程博士課程単位取得退学。帝京大学文学部専任講師、東京学芸大学教育学部助教授、一橋大学社会学部助教授、社会学部教授を経て、2000年から現職。放送大学客員教授、東京大学教養学部非常勤講師を兼任。専門は社会心理学、社会的認知研究。主な著書は、『社会と感情』（編著、北大路書房）、『新版 社会心理学研究入門』（共編著、東京大学出版社）など。

心理学の歴史と位置づけ

大学で初めて「心理学」の授業科目を担当したのは、1982年の博士課程3年生のことだった。それ以来、海外で過ごした年を除いて27年間、「心理学」を担当しなかった年はない。もしかすると、受講生総数は1万人を超えているかもしれない。現在は半年科目で、「認知・記憶・感情・推論」の4領域を扱っている。通年科目のときにはもっと多くの領域を含めていたし、用いる手法は若いころから変化した。しかし、「心の働きの科学」という観点とそこに至る「心理学の歴史」を、最初の数回の授業で説明することは一貫して変わらない。「機関銃のような」と学生が形容したことのある、板書を基本とする授業も変わらない。

心理学には「長い過去と、短い歴史」がある。ヴァントが「意識の科学」として心理学を創始す

るまでは、哲学の中に長い過去が見出される。その後、無意識のはたらきを強調するフロイトの精神分析や、要素主義を批判したゲシュタルト心理学が、心理学の歴史の流れを形作る。しかし、新大陸アメリカではじまった「行動主義」が次の大きな流れとなつて、「客観的な」心理学が大いに発展した。心理学は「魂」を失うことを通じて、自然科学としての要件を備えていったのだろう。その後、コンピュータなどの科学技術の発展の後押しを受けながら「認知革命」がはじまり、「情報処理過程としての心」が復権していく。今では心理学は「心の働きの科学」であり、ある状況でどのように認知過程がはたらき、判断や行動を導くのかを研究する。授業では「それをわかりやすくお話ししよう」と述べていく。

1982年当時、教養科目の「心理学」は人文科学の一つとされることが多かった。哲学を背景とする歴史的経緯からしても、この位置づけは理解可能だろう。ところが、私が初めて心理学を担当した大学では、自然科学の科目に含められていた。行動主義以降の心理学は、むしろこの位置づけでよいかもしれない。そのことを意識して、通年の教養科目の中に統計の基礎を含めた。しかし、学生にはたいへん不評で、すぐにやめてしまった。実際、女性が圧倒的に多かった広い意味での文系大学で自然科学の単位取得要件を学生が満たすためには、他の科目と比べて易しそうな心理学を、わざとそこに含め



図1 心理学の古い教科書の例
1973年に学んだものと、1990年頃に使用したその新版

る必要があったかもしれない。

心理学は物理学を目標にして発展してきたとよく言われるが、モノとは異なる「心」を対象とする学問を自然科学の一つと定義することに、原理的に抵抗を示す人は多いのではないだろうか。私もその1人で、構成概念としての心、あるいは心の機能を研究するのが心理学だと考えている。その意味で導入授業の最後には、心と脳とを対比させて、「心の中の幽霊」といった話も絡めながら、プシュケとエロスの話も織り込んで、ポピュラー心理学とは異なるアカデミックな心理学を説明する。

では、心理学は実際に、どの科学の中に位置づけられるのだろうか。授業で説明することはないが、社会科学の一つとするのが適当ではないだろうか。

ここで述べようとする「社会科学」に、特別の定義があるわけではない。ただ、社会だけではなく、社会を構成する人についても範囲に含むものと考えている。ここでは、社会科学を「人や社会にかかわる現象を科学的に探求しようとする学問の総称」という意味で用いたい。人文学 (the humanities) や芸術のままで留まらず、科学を志向する人文社会科学の総称である。私の主張は、その中の一つとしての心理学という自己定義をもったら心理学は変わる、ということである。

日本の心理学教育の組織

私が最初に専任となった帝京大学文学部では、心理学科新設の準備に2年間携わった。ところが、ようやく開設された4月から、教員養成を主任務とする東京学芸大学に転出した。それでも、新設されたカリキュラムを維持するために、結局4年ほど帝京大学へ非常勤講師として通い、「生活心理学」と「対人関係心理学」を教えた。この心理学科には、東京大学文学部心理学科出身の方を中心に10名弱の先生が着任した。他方で、転出先の東京学芸大学では、15名ほどから構成される教育心理学教室に所属して、社会心理学の科目はもちろんのこと、「教育統計法」「教育評価」「臨床心理学総論」

「道徳の心理学的基礎」「特別活動の理論と方法」など、さまざまな科目を教えることになった。この併任(?)の4年間、他の非常勤も含めて週10コマの授業を担当していた。研究者としてはどんどんダメになり、論文は紀要にさえほとんど書かず、学会発表もしなくなっていた。それでも大学教師としての生活は充実していて、授業からもゼミからも、他の先生方からも学生からも、今でも財産となっている多くのことを学んだ。

今から考えると、この若手大学教師としての経験は、「文心と教心の経験」として位置づかれるかもしれない。このとき、両者の対比という側面がすぐに思い浮かぶだろう。例えば、「文心」ではしばしば動物の話が出たが、「教心」では臨床実践とそれを取り巻く世界について多くのことを知った。他方で、両者を同化できるような側面、共通した内容もあるだろう。しかも、他の学問や学科の教育にはあまり認められない独特な性質があるのではないだろうか。その最大の特徴は、心理学実験演習を維持する体制にあると私には思われる。

心理学の学科や専攻やコースをつくっているほとんどの組織では、授業科目に「基礎実験」といった名前で、実験演習の授業科目を設けている。その学科に所属する受講生が班をつくり、自ら実験参加者となって毎週あるいは複数の週で一つの実験を受ける。そしてインストラクターから実験内容について説明を受けて、得られたデータを集計して計算をして、各自がレポートにまとめる。遅刻・欠席やレポートを期限までに提出しないことは原則として許されない。これを、助手や助教も含めて学科の先生方が総出で担当し、院生までTAとして動員して実施する体制に、日本の心理学教育の真髄をみることができると思う。

35年以上前の冬学期に私が東京大学の駒場キャンパスで経験した実験演習には、いま駒場にいる丹野義彦さん、駒場から離れた下條信輔さん、一橋の商研で組織論を教える佐藤郁哉さんなどがいたはずである。私はできたばかりの社会心理学科2期生であったが、実験演習につ

実験心理学演習第一部 指導書

順	科目	日付	出席
1	総合形成	20	出席
2	大塚の経験	20/22	出席
3	東の臨床心理学		
4	心理現象の構成	11-20	出席
5	筆記学習	11-21	出席
6	東の経験	11-22	出席
7	動物学習	10-31	出席
8	保護運動	1-16	出席
9	実行知覚	12-27	出席
10	動物観察		
11	図式形成	12/19	出席
12	心理活動の生理学的基礎	1/1	出席
13	社会心理学の発展	1/30	出席
14	社会心理学の発展	2/6	出席
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50			
51			
52			
53			
54			
55			
56			
57			
58			
59			
60			
61			
62			
63			
64			
65			
66			
67			
68			
69			
70			
71			
72			
73			
74			
75			
76			
77			
78			
79			
80			
81			
82			
83			
84			
85			
86			
87			
88			
89			
90			
91			
92			
93			
94			
95			
96			
97			
98			
99			
100			

氏名 村田 光二

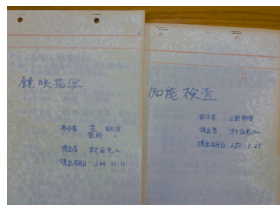


図2 「文心」の実験演習 (1974) の出席チェック表と、「教心」の実験演習 (1974) で提出したレポート例

いては心理学のそれに間借りして、「文心」といっしょの枠内で受講させてもらった。同時に、「教心」の実験演習も受講させてもらった。こちらは本郷キャンパスに通う必要があり、年が明けて少し経った頃が続けることが困難になって履修を放棄してしまったが、いま本郷にいる南風原朝和さんや、その後精神医学に転身した小西聖子さんが同期だった。

実験演習を維持しているので、心理学の先生方はとても教育熱心に見受けられる。少なくとも若手の担当者は、1通ずつレポートを読み、必死にコメントをつける。それを集団指導体制で行っている点も、他の文系の大学教育にはあまり認められない特徴だと思う。それが「第二部」だとか「特殊実験」といった名前になって専門的な実験を実習し、卒論での実験研究につなげる体制が、日本の心理学教育組織の基本的特徴だったのではないだろうか。あたかも職人が職人を育てるように、心理学研究に必要な基本的作業を、よく知られた材料を用いながら繰り返し経験させる。レポートを書き、それが評価されるまでが研究であることを身をもって経験させる。実験演習を通過すると、なんだか少し心理学の専門家らしくなって誇らしい気分になる。そういった育成装置は心理学研究の発展のためにも大いに役立ってきたのであろう。

けれども、私がこの小文で指摘したいのは、そのネガティブな側面である。親身な指導に費やしたコストに見合うだけのパフォーマンスは上がっているだろうか。大学へ入学できる学生の層が以前よりはるかに拡大した現在、30年以上前と同じ教育体制を続けることは適切なの

だろうか。日本がしばしば範をとる北米の大学では、学部レベルで必修の実験演習を課しているのだろうか。カナダのウォータールー大学の心理学科に8ヵ月ほど滞在させてもらったことがあるが、世話をしてくれた学生に学年を尋ねても答えにくそうで、「今はフルタイムのリサーチアシスタントとして働いて、次の学期はフルタイムの学生に戻って卒論を書いて、翌年春に卒業」といった答えであった。彼女は大学院をめざし、翌年秋にはマギル大学に進学した。卒論だって“honors thesis”であり、選び抜かれた（そこまで必要とされる単位をとった）学生だけが研究して書くものであった。

実験演習体制によって、共同して教育にあたる教師集団が育成され、教師間でも、教師と学生との間でも、親密な人間関係ができるかもしれない。しかし、不必要に干渉しあったり、逆に義務的作業に対して社会的な手抜きが生まれたりすることはないだろうか。人間関係を維持するためにも多くのコストがかかる。30年の幅に15名が並んでいた以前の大学では、平均2年に1人が定年を迎え、そのたびになんらかの行事が開かれ、還暦やら叙勲やらでもさらに行事が開かれ、それにかけたコストは結構大きかった。大学で働く多くの人が「忙しい」とつぶやく現代社会において、濃密な対人関係ばかりがよいとは限らない。どこかに葛藤が生じたときには、最も居心地の悪い集団になってしまうかもしれない。

実験演習は通例、心理学科限定である。たしかに、外部に対して排他的な教育も必要だろう。かけているコストから考えて、専門でもない人にどうしてサービスする必要があるのか、誰だって疑問に感じる。しかし、やる気があって、心理学の学生を刺激するような存在が他にいないとは限らない。大学院になれば、例えば東大の心理学関係の院にもさまざまな大学や専攻から進学が実質可能になっている。潜在的な心理学関心層に実験演習を提供しておくことは、実は後に心理学の利益になるかもしれない。こういった限定科目は、しかも、心理学が特権的な地位にあると嫌みに思われかねない。

社会科学系大学での心理学

東京学芸大学に5年間いた後に、私は現在の一橋大学に着任した。そこは商・経済・法・社会の4学部からなる社会科学系の大学であった。社会学部の社会心理学研究室に所属したが、私以外には社会学者とマスコミ研究者がいるだけの3人体制であった。それは今でも変わらない。お2人は著名な南博先生のお弟子さんだった。南先生はコーネル大学で心理学を学んだそうだが、一橋大学では心理学とは別個の独立した「社会心理学」を打ち立てようとしていたらしく、心理学者の弟子は持たなかったようである(実際には私の前任者がいたはずだが、「ノストラダムスの予言の研究」しか記録がない!?)。

前任校と規模はほぼ同じ国立大学であったが、教育の体制はまるでちがっていた。社会学の方が「社会心理学第一」という講義を、私が「社会心理学第二」を、そして保健センターの精神医学者が「社会心理学第三」を担当したが、互いの講義内容について何一つ打ち合わせする必要もなかったし、授業時間もほぼ希望通りに決まった。なにより、それ以外の専門の講義をもつ必要はまったくなかった。他には1, 2年生向けの授業を一つもつことが約束事項で、私は教養科目の「心理学」を担当した。前任校では学生の学科や専攻、そして入学年度に応じて数十種類もの時間割表が存在したが、一橋大学では4学部でたったの1枚だった。そしてなによりも、4学部の全教員の中で、たった1人の心理学者だった。

一橋大学の教育はゼミに特色があって、3, 4年次に必修となり、そこで卒論を書く。社会学部の場合は、学科や専攻の縛りがなかったので、ゼミが大学での専門のすべてであった。私は着任時に、15名の3年生をゼミに受け入れ、なかには法学部と経済学部の学生もいた。その後も、毎年8~10名の学生を受け入れ続けている。ゼミ生が0名の教員もいるはずだが、この人数調整も行わない。学生の希望をできるだけかなえるためであるらしい。その結果、心理学で卒論を書かせるため、10名程度の3年生に実験実習を教える必要がある。ゼミでしか勉強

しないような学生たちなので、ゼミでは徹底的に鍛える(本筋とは別だが、山に登らせ、マラソンにも誘い、スキーも教える)。初期には主として質問紙調査で実習をさせて、得たデータの分析も教えた。統計の授業など2005年まで一つもない学部だったので、これについても自分で教えてきた。

極端に言えば、1人で1学科体制のようなものであった。その後、徐々に大学院生が増えて、実験実習を担当してもらい、少しずつ研究室らしい体制ができていった。実験室は(3人共用で、データ解析用のパソコン室兼用のものが)1つしかなかったが、演習室などを借りてなんとかしのいだ。大変だったけれど、多くのことを自分で決めて自由にできた。その後、2年生向けの実験演習の授業を「教養ゼミ」という一般的な枠の中で勝手につくって実施していたことや、15名にも及ぶ大学院生を指導するようになったことなど、心理学・社会心理学の教育体制について語りたいことは山ほどある。しかし、すでに紙幅は尽きているようなので、社会科学系の大学にいた経験から、心理学のこれからについて私の意見を最後に述べよう。

ひとことで言えば、社会科学の世界で認められる心理学になってほしい。近年、大学でも学会でも社会貢献が重要視されることになった。心理学が広く世の人々に知られるように公開行事が増えた。それはたしかに必要だろう。しかし、法学・政治学・経済学・経営学・社会学・社会人類学・言語学など、他の社会学者たちにも心理学研究について知って、認めてもらうことが大切ではないだろうか。自然科学に近い、と上から目線で接するよりも、同じ地平から貢献できることを示そう。そして、法学部にも心理学者が1人いる、経済学部にもいる、経営学部にはアメリカのMBAがそうであるように社会心理学出身者が結構いる、といった認められ方が必要ではないだろうか。そのときは、「文心」や「教心」といった集団に取り込まれている研究者ではなく、異質な他者と協力する重要性を理解しながら、課題に立ち向かっていく研究者であることが必要だろう。